



TITLE:

条件文の意味と使用

AUTHOR(S):

喜田, 浩平

CITATION:

喜田, 浩平. 条件文の意味と使用. 仏文研究 1999, 30: 1-18

ISSUE DATE:

1999-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137899>

RIGHT:

条件文の意味と使用

喜 田 浩 平

序

語や構文などの言語形式を研究する場合に、それ自体がどのような意味を持つかという視点から観察する方法がある。この場合、「意味」とは、例えば語が喚起する「観念」であるとされたり¹⁾、あるいはそれが指し示す実在世界の事物のことである²⁾と考えられたりする。これに対して、そのような語や構文がどのように使われるか、あるいはそれを使って何をすることができるか、という観点から研究することもできる。つまり言語形式の「使用」の側面に重点を置くわけである。例えば、いわゆる「言語行為論」の立場³⁾では、語を使ってどのような行為を遂行することができるかということが問題になる。本稿は、言語行為論とは別の形で、「使用」の側面から言語を研究する一つの方法の可能性を示唆する試みである。

議論の出発点にフロイトの『機知の言葉⁴⁾』に見られる笑い話を選んだ。原文はドイツ語で書かれているが、フランス語訳⁵⁾を参照し、あたかもフランス語で書かれたテキストであるかのように扱う。あくまでもフランス語の研究として読んでいただきたい。本稿はフロイトのテキストの文献学的研究が目的ではなく、純粋に言語学的関心からフランス語を観察するものなので、この点を了解いただきたい。

フロイトの笑い話はどこが面白いのか。なぜ面白いのか。笑い話としての解釈がなぜ成立するのか。このような問題に言語学の側から一つの解決策を提案したい。その際に「使用」の観点が有益であることを示したい。とりわけ、この笑い話で重要な役割を担う「条件文」(後述)に焦点を絞り、そこに「使用」の観点を導入することが議論の中心になる。また「使用」と一口にいっても様々な側面があるが、本稿では特に言語を使って行う「論証」(後述)に注目する。

以上の試みが成功すれば、言語学がテキストの分析に貢献できることも同時に示せるものと思う。文学者からとかく敵視(あるいは敬遠)されがちな言語学が、単純で陳腐な(?)作例を扱うだけではなく、実例としてのテキストの研究に様々な概念装置を提供できることを明らかにしたい⁶⁾。

『機知の言葉』と条件文

『機知の言葉』には次のような笑い話がある。登場人物は馬の商人と客である。

Si vous prenez ce cheval et si vous vous mettez en route à quatre heures du matin, vous serez à six heures et demie à Presbourg. — Et qu'est-ce que j'irais faire à Presbourg à six heures et demie du matin? (p.119)

(この馬を買って朝の4時に出発すれば、6時半にはプレスブルグに着きますよ。——朝の6時半にプレスブルグに行っていって何をするんだい。)

いくつかの研究⁷⁾が指摘するように、この話の核心は、そこに意味の「ずれ」があることである。この点を確認するために、まずは「直感的」に（つまり厳密な概念は使わずに）この話を分析してみよう。

まず商人の立場に身を置いてみよう。商人はその発話で、いわば「それ以上のこと」を伝えようとしている。あるいは「それ以外のこと」を伝えようとしている。これを言語化するのは難しいが、強いていえば、例えば「これはいい馬ですよ」「これは速い馬ですよ」など、馬の特徴（あるいはその長所）を強調するもの、あるいは「この馬を買って下さい」など、買うことを促すようなもの、とっていいであろう。これらを厳密に区別することができるのかそれとも渾然一体となっているのか、区別が可能だとしてこのうちどれが最も商人の意図するところに近いかということは今では問題にしない。重要なのは、商人の発話は（このような区別が仮に許されるなら）「字義通りの意味」と「言外の意味」（あるいは「暗黙の意味」）を持ち、客に伝えようとしているのは後者であるという点である。

今度は客の方に目を転じてみよう。客は商人の「伝えたいこと」とは別の次元で発話を解釈している。ただしこの「伝えたいこと」を本当に理解しているのか否かはわからないし、さして重要なことでもない。もし理解しているとすれば、客はそれを無視しながらとぼけている（あるいははぐらかしている）ことになるだろう。また理解していないとするならば、単に素朴な疑問を商人に投げかけていることになるだろう。いずれにせよ重要なのは、客は商人の発話を、商人が意図する（あるいは期待する）のとは別の仕方理解している（あるいは理解するふりをしている）ことである。

上記の研究はこのような「ずれ」を認めてはいるが、ではなぜこのような「ずれ」が生じるのかという点には明確な答えを用意していない。以下で一つの解決策を提案したい。とりわけ、それに言語学的理由があることを明らかにしたい。本稿の仮説は、このような問題の解決の糸口は商人の発話の文法構造に内在しているということである。具体的には、そこで使われている si（もし〜なら）に全てが帰因すると考える。

Si P, Q という形の文で、P が「条件」、Q がその「帰結」として解釈されるものを「条件文」

と呼ぼう。例えば「S'il fait beau, je sortirai.」（天気良ければ私は出掛ける）や「Si Jean vient, Marie sera heureuse.」（ジャンが来ればマリーが喜ぶ）などは条件文である⁸⁾。フロイトの笑い話に出てくる商人の発話は、この意味での条件文である。従ってそれを分析するためには、条件文についての理論が必要となる。その枠組みとして、少なくとも二つの方向性が考えられる。

一つは、条件文の「意味」は何かという問いに重点を置くものである。この場合例えば、P そのものが何を意味するか、Q そのものが何を意味するか、また「条件」とは何か、「帰結」とは何か、P と Q の間にはどのような関係（因果関係、論理的含意関係など）が成り立つか、などの問題を中心に議論を進めることになるだろう⁹⁾。しかしこのような観点は、フロイトの話の分析にそれほど有用であるとは思われない。

もう一つの方法は、条件文の「使用」に注目するものである。具体的には、条件文をそれ以上小さい要素には分解せず、一つの「かたまり」とみなし、それをあたかも道具であるかのように見立て、どのように「使う」ことができるか考えることになる。本稿ではこの立場を発展させる。

しかし一口に「使用」といっても様々な側面がある。漠然と「言語を使って何ができるか」と問うならば、「無数のことができる」と答えざるを得まい。そこで「使用」という概念をもう少し限定する必要がある。ここでもまた様々な選択肢がある。

一つは前述の言語行為論の立場である。この観点からは、条件文を使ってどのような「行為」を遂行することができるかが問題になる。例えば条件文を使って「脅迫」することができる。モリエールの『町人貴族¹⁰⁾』の第3幕第2場に次のような例がある。奇妙な格好をしたジュールダン氏を見て、女中のニコルが笑い転げる。怒ったジュールダン氏は笑い続けるニコルに言う。

Tiens, si tu ris encore le moins du monde, je te jure que je t'appliquerai sur la joue le plus grand soufflet qui se soit jamais donné (p.735).

（これ以上すこしでも笑ったら、頬っぺたに平手打ちを喰わせるぞ、途方もなく大きなやつをな。p.45）

この発話は様々な解釈が可能である。例えばジュールダン氏は、「笑うことを禁止している」と解釈できるし、また「怒り（あるいは不満）を表明している」ともいえる。しかしそのような多様な解釈が混在する中で、少なくともある一つのレベルにおいて、ジュールダン氏がニコルをこの発話によって「脅している」といえるのではないだろうか。また条件文を使って、「歓心を買う」こともできる。同じく『町人貴族』の第3幕第6場に次のような例がある。ジュールダン氏から金を借りたドラントは、お礼に「何かお役に立ちたい」と言った後、次のように続ける。

Si Madame Jourdain veut voir le divertissement royal, je lui ferai donner les meilleures places de la salle (p.745).

（ジュールダン夫人が王様の催しものを見たいとおっしゃるなら、一番いい席をとって差しあげます。p.60）

ドラントはこの発話そのものによって、ジュールダン氏（あるいはジュールダン夫人）に気に入られよう（あるいはジュールダン氏を喜ばせよう）という行為を遂行している（その結果としてジュールダン氏が現実に喜ぶかどうかは重要ではなく、ドラントの発話行為そのものがどのような特徴を持っているかという問題である）。以上はいずれも「発語媒介行為¹¹⁾」の例といえるだろう。

言語行為論の観点そのものは非常に興味深いが、残念ながらフロイトの話の分析には応用できない。本稿では言語行為論とは別の観点から条件文の「使用」を考察してみたい。そのために「論証」の概念を導入する¹²⁾。

言語の使い方：「論証」

言語を使ってできることの一つに「論証」がある。これは、一つの結論や主張の信憑性を高めそれに説得力を与えるために、論拠をあげて正当化するという言語の機能である。例えば「今日は天気がいい」ということを論拠に「出掛けよう」という主張を行うような場合がその例である。ただし論拠と結論は一つだけとは限らない。一つの結論を正当化するために複数の論拠を列挙することもできる。例えば、食事をする場所を探している人にレストランを推薦する場合に、単に「あのレストランにしろ」というだけでは説得力がないので、「美味しいから」「安いから」「サービスが良いから」「近いから」「夜遅くまで開いているから」などの論拠を並べることができるだろう。また一つの論拠から様々な状況で様々な結論を導くことも可能である。例えば「ピエールは金持ちだ」という文を論拠とすると、ある状況では「ピエールは幸せだろう」という結論が導けるかもしれないが、別の状況では「もてるだろう」という結論が導けるかもしれない。更に別の状況では「税金が大変だろう」「豪邸に住んでいるだろう」などの結論が導けることもある。もちろん状況によってこれ以外にも様々な結論が導けることはいうまでもない。またそのうちのいくつかが矛盾なく同時に導ける場合もある。いずれにせよ、この現象がいかに日常的なものであるか理解できるだろう。これ以外にも政治家の発言や、メディアにおける広告やコマーシャルで「論証」が頻繁に行われていることは容易に観察できる。

さて、このような意味での「論証」の概念は伝統的な修辞学では特に目新しいものではない。以下では、「論証」という現象が狭義の言語学においても興味深いものであることを示したい¹³⁾。それは次のような事実裏付けられる。任意の文 A を論拠とすると、その発話から結論 B が導けるとする。もちろん B は文脈や状況によって無数の可能性があることはいうまでもない（先述の「ピエールは金持ちだ」の例を想起されたい）。しかし A においてある種の語や構文を使うと、B の選択に制約を課すことがある。以下にいくつか具体例をあげる。

例えばピエールが入院し、手術を受け、病状が回復中だと仮定しよう。ここでピエールが食事にパンを一かけら食べたとして。この状況を表現するのに少なくとも次の二つの方法がある。

Pierre a un peu mangé.

(ピエールは少し食べた。)

Pierre a peu mangé.

(ピエールは殆ど食べなかった。)

この二つの文は、客観的には同じ事態を表現しているにもかかわらず、そこから導ける結論は大きく異なる。前者からは「Il ira mieux.」(彼は良くなるだろう)や「Sa femme sera contente.」(彼の妻は満足だろう)などの結論が導けるのに対し、「Il n'ira pas mieux.」(彼は良くならないだろう)や「Sa femme sera inquiète.」(彼の妻は不安だう)などの結論を導くのは困難である。一方、後者についてはちょうど逆のことがいえる。従って、同じ事態を表現する場合にも、un peu (少し)を使うか peu (ほとんど〜ない)を使うかで、そこから導かれる結論が正反対のものになることがわかる。

同様に、ピエールがゴダールの映画をいくつか見たことがあるという事態を表現するのに、少なくとも二つの方法がある。

Pierre a vu quelques films de Godard.

(ピエールはゴダールの映画をいくつか見た。)

Pierre n'a pas vu tous les films de Godard.

(ピエールはゴダールの映画を全て見たわけではない。)

前者から「Il connaît Godard.」(彼はゴダールに詳しい)や「Il pourra te renseigner.」(彼は君に(ゴダールについて)色々教えてくれるだろう)などの結論を導くのは容易だが、後者からは困難である。逆に後者から「Il connaît mal Godard.」(彼はゴダールに詳しくない)や「Il ne pourra pas te renseigner.」((ゴダールについてあれこれ)教えられないだろう)という結論が導かれるが、前者から同じ結論を導くのは不自然である。ここでも、同じ事態を表現するにも、異なる形を使えば異なる結論が導かれることになる。

少し違った例をあげよう。ピエールとマリーが一緒に出掛ける約束をしているが、ピエールはまだ少し仕事をやり残している。しばらくしてから、次のような発話があったとする。

Pierre a presque fini.

(ピエールは殆ど(仕事を)終えた。)

「殆ど終えた」ということは、客観的に言えば完全に終えたわけではない。にも関わらず、ここから導ける結論は「Marie n'aura pas à l'attendre longtemps.」(マリーはピエールを長く待つ必要はないだろう)などであり、「Marie va devoir l'attendre un peu.」(マリーはピエールを

少し待たなければならない) ではない。つまり、あたかも仕事が終わったかのような結論が導かれることになる。では今度は、更に時間が経過し、次のような発話があったとしよう。

Pierre a à peine fini.

(ピエールは(仕事を)終えたばかりだ。)

「終えたばかり」である以上、客観的には完全に終わっているはずである。しかしここから導ける結論は « Marie va devoir l'attendre un peu. » であり, « Marie n'aura pas à l'attendre longtemps. » ではない。つまりあたかも仕事が終わっていないかのような結論が自然に導かれるわけである¹⁴⁾。ここでも, presque (殆ど) や à peine (～したばかり) の使用がそこから導ける結論の選択に影響を与えている。しかも興味深いことに, この例は, 客観的な視点からの予想が実際の論証の可能性と食い違うこともあることを示唆している。つまり言語の論証可能性は, 客観的事態とは異なる次元で, それ固有の規則性を保っていることになる。

以上の例からわかるのは, peu や presque などの働きを記述するという極めて言語学的な問題に, 「論証」が深く関わっていることである。換言すれば, 「論証」は少なくとも部分的に文法要素化されているといえる。従って, 「論証」は「修辞学」だけではなく「文法学」で, (ソシユールの)「パロール」の研究だけではなく「ラング」の研究で, 「語用論」だけではなく「意味論」で, それぞれ扱われるべき現象である。以下ではこの考え方を発展させ, 条件文の機能を観察してみたい。

条件文を使った「論証」

条件文を論拠とした場合に正当化し得る結論はどのようなものか。換言すれば, Si P, Q という発話に続けて Donc X 言う場合, X に何らかの傾向を認めることができるだろうか。以下では, Si P, Q の発話から導ける結論 X はある程度予測し得ることを示したい。もちろん, X の選択には P と Q の内容に加えて, 発話の文脈や状況の要素が複雑に関連し, 無数の可能性があることはいうまでもない。しかし X の性質は, P と Q の内容に応じていくつかのタイプに分類できることを明らかにしたい¹⁵⁾。

私見では, 少なくとも三つのタイプ分けが可能であると思われる。

(i)まず第一のタイプでは, X は「Q が成立する場合に, それに続けて起こりうること」をあらわす。次の条件文を見てみよう。

(1) S'il fait beau, Pierre viendra.

(天気がよければピエールが来る。)

ここで、ピエールが来る場合には食事を用意し、来ない場合はその必要がないことが了解されているとしよう（これを文脈1とする）。論理的に考えれば(1)はピエールが来るとも来ないとも明言していないので、ここから導き得る結論は、「食事を用意する」と「食事を用意しない」のどちらにも決定できないはずである。ところが実際はそうではない。次の例を比較してみよう。

(2) S'il fait beau, Pierre viendra. Donc, je vais lui préparer un repas.

(天気がよければピエールが来る。だから食事を用意しよう。)

(3) S'il fait beau, Pierre viendra. Donc, inutile de lui préparer un repas.

(天気がよければピエールが来る。だから食事の用意はいらない。)

上記の文脈1では、(2)は自然であるが、(3)は奇妙である。このように、(1)から導き得る結論は、あたかも「Pierre viendra」（ピエールが来る）を明言したかのようなものに限られる。

ここで、(3)はそれ自体で非文法的ではなく、自然に理解できる文脈が存在する、という批判があるかもしれない。確かに、別の文脈で、例えばピエールが憎らしい人物で、もし来るならば嫌がらせをしてやろうというような場合（これを文脈2とする）には、(3)は問題なく解釈できる。しかしこれは反例ではなく、むしろここでの主張を裏付けるものである。なぜなら、「食事の用意はいらない」ということは、まさに文脈2において「ピエールが来る」が成立する場合に生じ得ることに他ならない。しかもこの文脈では今度は(2)が不自然になる。このように、文脈1で(2)が自然に解釈されることも、文脈2で(3)がそうであることも、同じように説明することができる。

今度は、文脈1で(1)のかわりに次のような発話があったとしよう。

(4) S'il ne fait pas beau, Pierre ne viendra pas.

(天気が悪ければピエールは来ない。)

ここでも論理的に考えれば、「ピエールが来る」とも「ピエールが来ない」とも明言されていない。しかしここからどんな結論でも導けるわけではない。

(5) S'il ne fait pas beau, Pierre ne viendra pas. Donc, je vais lui préparer un repas.

(天気が悪ければピエールは来ない。だから食事を用意しよう。)

(6) S'il ne fait pas beau, Pierre ne viendra pas. Donc, inutile de lui préparer un repas.

(天気が悪ければピエールは来ない。だから食事の用意はいらない。)

当該の文脈で(6)は自然だが(5)は不自然である。ここでも、条件文の後半部分、すなわち「Pierre ne viendra pas」（ピエールは来ない）から導ける結論だけが自然なものとして解釈される¹⁶⁾。

(ii)次に第二のタイプでは、Si P, QにおけるQについての価値判断が関与してくる。Qが望ま

しいこととして提示されているか否かで、二つのケースに下位分類される。

(a) まず Q が「望ましい」「有利である」「利益になる」などと解釈される場合、Si P, Q 全体から導かれる結論は「P の成立が望ましい」というものになる。次の例を見てみよう。

(7) Si tu travailles, tu réussiras à ton examen.

(勉強すれば試験に合格する。)

この条件文の後半部分が望ましいこととして解釈される状況を考えてみよう。この場合、(7) から導き得る結論はどのようなものだろうか。次の例を比較しよう。

(8) Si tu travailles, tu réussiras à ton examen. Donc, il faut que tu travailles.

(勉強すれば試験に合格する。だから勉強しなさい。)

(9) Si tu travailles, tu réussiras à ton examen. Donc, il ne faut pas que tu travailles.

(勉強すれば試験に合格する。だから勉強してはいけない。)

明らかに(8)の方が自然である。もちろん(9)が全く解釈できないというわけではない。例えば「合格する」ことになにか不都合があるような場合は、(9)の方が自然である。しかしこの場合は、次の(b)のケースに当てはまることになる。

(b) 上記の(a)とちょうど対称的に、Q が「望ましくない」「不利である」「害になる」などと解釈される場合、Si P, Q 全体から導かれる結論は「P の成立が望ましくない」というものになる。

(10) Si tu rentres tard, tu seras puni.

(遅く帰ればお仕置きですよ。)

ここで「お仕置き」が望ましくないと解釈される場合を想定し、次の二つを比較しよう。

(11) Si tu rentres tard, tu seras puni. Donc, il ne faut pas que tu rentres tard.

(遅く帰ればお仕置きですよ。だから遅く帰ってははいけません。)

(12) Si tu rentres tard, tu seras puni. Donc, il faut que tu rentres tard.

(遅く帰ればお仕置きですよ。だから遅く帰りなさい。)

「遅く帰る」ことの成立を阻止するよう促す(11)は自然に理解できる。もちろん、(12)が解釈できる状況が存在しないわけではない。例えば皮肉として発話された場合。しかしまさに「皮肉」であるのは、(12)に何か普通でないものがあるからだといえるのではないだろうか。また「お仕置き」が望ましいものとして解釈される場合(例えば聞き手がマゾヒストの場合)も(12)は自然に理解できる。しかしこの場合は上の(a)のケースを裏付ける例になることはいうまでもない¹⁷⁾。

(iii)最後に第三のタイプでは、Si P, Q から導かれる結論 X が「Si P, Q を一言で表現すれば（要約すれば）Xである」というものになる。次の例を見てみよう。

(13) Si je bois du lait, je suis malade.

(牛乳を飲むと私は病気になる。)

ここから導ける結論は、例えば次のようなものである。

(14) Si je bois du lait, je suis malade. Donc, je suis allergique au lait.

(牛乳を飲むと私は病気になる。だから私は牛乳アレルギーだ。)

「牛乳を飲むと病気になる」ということを言い換えれば「私は牛乳アレルギーである」、ということである。また次の例でも同様である。

(15) S'il y a du danger, Pierre prend des précautions.

(危険があるとピエールは用心する。)

ここから導ける結論は、例えば次のように表現できる。

(16) S'il y a du danger, Pierre prend des précautions. Donc, Pierre est prudent.

(危険があるとピエールは用心する。だからピエールは慎重だ。)

「危険があると用心する」とは即ち「慎重である」ことに他ならない。以上は Si P, Q から見て X はどのような性質であるかを検討するものであったが、逆に X の視点から Si P, Q を見ると、このタイプ(iii)において、Si P, Q は X の一種のパラフレーズになっているといえる。「牛乳アレルギー」をパラフレーズすると「牛乳を飲むと病気になること」であり、「慎重である」とはどのようなことかというところ、「危険があると用心すること」に他ならない。従って、タイプ(iii)において、Si P, Q から導かれる結論 X をどのように規定するかといえば、「それをパラフレーズするとちょうど Si P, Q と言い換えられるような、そのような X を探せ」ということになる¹⁸⁾。

以上の分類に関して、いくつか補足しておきたい。

まず、この分類は決して網羅的なものではない。三つのタイプに加えて、第四や第五の可能性があるかもしれない。しかし様々な例を検討したところ¹⁹⁾、多くの場合この三つのうちのどれかに分類できたので、今のところこれで十分であるように思われる。

次に、全てのタイプが同等の資格であるかどうかという問題については判断を保留しておきたい。一つのタイプを別のタイプに還元できるかもしれない。例えばタイプ(ii)は実はタイプ(i)のヴァリエーションに過ぎないかもしれないし、またその逆かもしれない。あるいはどのタイプとも異なる、

もっと抽象的かつ一般的な原理が存在し、三つのタイプ（さらには第四、第五のタイプも）そこから演繹的に説明できるかもしれない。しかしこの三つのタイプの分類が実際上の作業において便利であるので、今のところはそのようなものとして確保しておくことにする。

最後に、一つの条件文がどれか一つのタイプのみに排他的に分類されるわけではない。ひとつの条件文が、ある文脈でタイプ(i)として理解されるが別の文脈では別のタイプとして理解されることは十分にありうる。例えば、「S'il fait beau, Pierre viendra. »（天気によければピエールが来る）はタイプ(i)の例として提示したが、別の文脈ではタイプ(ii)として解釈することもできる。「ピエールが来る」ことが望ましいと判断されれば、次のような論証も可能である。

S'il fait beau, Pierre viendra. Donc, je souhaiterais qu'il fasse beau.

（天気によければピエールが来る。だから天気がよくならないかなあ。）

これはタイプ(ii)の(a)である。また「ピエールが来る」ことが望ましくない場合、次のような論証が可能である。

S'il fait beau, Pierre viendra. Donc, ça m'ennuierait qu'il fasse beau.

（天気によければピエールが来る。だから天気がいいと嫌だなあ。）

これはタイプ(ii)の(b)である。更に、全体をひとまとめにして要約し、次のように結論することもできる。

S'il fait beau, Pierre viendra. Donc, Pierre aime le beau temps.

（天気によければピエールが来る。つまりピエールは晴れが好きなんだ。）

同様に、「Si je bois du lait, je suis malade. »（牛乳を飲むと私は病気になる）はタイプ(iii)の例として提示したが、別の文脈では違ったタイプの結論を正当化することもできる。例えば「病気になる」ことが望ましくない場合、次のような論証が可能である。

Si je bois du lait, je suis malade. Donc, il ne faut pas que je boive du lait.

（牛乳を飲むと私は病気になる。だから私は牛乳を飲んではいけない。）

これはタイプ(iii)の(b)である。

以上から次の二点が明らかになった。まず条件文を使って何らかの結論を論証する場合、そこにいくつかの傾向が認められること。本稿では特に、三つのグループ（二番目は更に二つに下位区分される）を提案した。次に、一つの条件文が文脈に応じて複数の論証のタイプとして機能しうること。つまり同じ条件文が正当化する結論が、ある文脈ではタイプ(i)であったり、また別

の文脈ではタイプ(ii)やタイプ(iii)であったりする可能性がある。以下ではこの観点から『機知の言葉』の商人の発話を分析したい。

使用の「ずれ」

商人は、条件文を使って何らかの結論を論証している。その結論は明示されていないため、どのようなものであるか特定するのはなかなか厄介であるが、例えば「これはいい馬です」や「これは速い馬です」と考えるのが適当ではないだろうか。この場合、上記のタイプ(iii)にあてはまる(条件文の内容を一言で要約している)。あるいは「この馬を買って下さい」かもしれない。この場合は、タイプ(ii)の(a)である(「プレスブルグに着くこと」が客にとって利益になると考えられる)。これに対して、客の方は商人の発話がタイプ(i)の結論を示唆していると理解する(あるいは理解するふりをする)。つまり客の理解では、商人の発話が示唆する結論は、「プレスブルグに着く」が成立した後起こりうることにしかかわるものになる。

以上の分析が正しいとすると、フロイトの話の核心には、「意味」のずれではなく、「使用」のずれがあることになる。商人の発話に複数の「意味」(商人の意図する意味と客が理解する意味)があり、そこにずれが生じるのではない。商人の条件文は本人にとっても客にとっても同じ「意味」である。違うのは条件文の「使い方」(とりわけ論証的な使い方)であり、そこにずれが生じるのである。

この点を明確にし、「意味」のずれと「使用」のずれの違いを一般化するために、ここで別の例をあげてみたい。まず「意味」のずれ、そこから生じる曖昧さや多義性にかかわる現象をいくつか列挙してみる(網羅的なものではない)。

まず「指示的曖昧さ」。指示的表現(代名詞、定冠詞による記述的表現)はどのような人やモノを指し示すか(どのような「指示対象」を持つか)が決定されない限り曖昧である。例えば次の例を見てみよう。

Il est con.

(あいつは馬鹿だ。)

ここで«Il»が誰を指し示すか(ピエールなのかポールなのか、など)によって、複数の解釈が可能である。この特徴を上手く利用して喜劇的效果をあげたものに、モリエールの『守銭奴』がある²⁰⁾。また、指示対象の曖昧さは定冠詞による記述表現にも生じる。

Le président de la République est chauve.

(共和国大統領ははげである。)

« Le président de la République » (共和国大統領) は、1999年に発話されればジャック・シラクを指し、1990年に発話されればフランソワ・ミッテランを指す。かくして、この文全体が、発話される状況に応じて異なった解釈を受けることになる。

次に「語彙的曖昧さ」。次の例を見てみよう。

La cuisine de Marie est impeccable.

« cuisine » には少なくとも二つの意味があり (料理／台所)、どちらを選ぶかによって「マリーの料理は完璧だ」あるいは「マリーの台所は完璧だ (手入れが行き届いている)」と解釈される。同様の曖昧さは、« bureau » (事務机／事務所)、« bibliothèque » (本棚／図書館) などにも見られる。以上は、一つの語に複数の意味があるがそれぞれの意味に内的な関連性がある場合、すなわち「多義語」の場合であった。これ以外にも「同音異義語」の場合、すなわち一つの語に全く関連のない意味が偶然結び付いている場合もある。« cousin » (いとこ／蚊の一種)、« fraise » (いちご／錐の一種) などがその例である。これらが複雑に組み合わせさった特殊なものとして、次の例²¹⁾がある。

La petite brise la glace.

« petite » を「女の子」と読むかそれとも (「そよ風」を修飾する)「弱い」と読むか、また « brise » を「(ガラスを) 割る」と読むか「そよ風」と読むか、« la » を定冠詞とするか代名詞とするか、そして « glace » を「ガラス (あるいは鏡)」と読むか「冷たくする」と読むかで二通りの解釈が可能である (「少女がガラスを割る」と「弱いそよ風が彼女を冷たくする (弱いそよ風が吹き彼女は寒気がする)」)。

また「スコープの曖昧さ」もある。次の例を見てみよう。

Tous les garçons ont dansé avec une fille.

(全ての男の子が一人の女の子と踊った。)

この文には少なくとも二通りの解釈が可能である。一つは「全ての男の子が (その場に居合わせた) 唯一の女の子 (例えばマリー) と踊った (複数の男の子に対して女の子は一人しかいなかった)」という解釈。もう一つは、「全ての男の子がそれぞれ一人ずつ別々の女の子と踊った (従って男の子と女の子は同数である)」という解釈。この曖昧さは、« une fille » (一人の女の子) がどこに「かかる」か、すなわちどのような「スコープ」(射程) を持つかによって生じる (« tous les garçons » (全ての男の子) を一括するスコープか、それともばらばらにするスコープか)。同様に、否定のスコープの曖昧さもある。

Tous mes amis ne sont pas venus.

この例は、「ne...pas」(～でない)が« tous mes amis sont venus »(私の全ての友人が来た)にかかるかそれとも« sont venus »(来た)にかかるかによって二通りに解釈される(「私の友人の全員が来たわけではない」あるいは「私の友人は誰も来なかった」)。

以上のような現象を「意味のずれ」と呼ぶならば、フロイトの話の商人の発話には、この意味での「ずれ」はない。そこにあるのは「使用」のずれである。この現象は実はそれほど珍しいものではなく、笑い話には頻繁に利用される古典的な手法である。例えば次のコリュージュの例(Coluche, *L'Horreur est humaine*, Livre de poche, 1992, p.153)にも認められる。

C'est l'histoire d'un mec qui dit à un autre mec :

— Je vais vous raconter une histoire belge!

— Mais vous savez, je suis belge!

— Ça fait rien, je la raconterai deux fois!

(ある男の話。別の男に言う。

「今からベルギー話をします。」

「ちょっとちょっと、私はベルギー人ですよ。」

「大丈夫。二回言いますから。」)

これはいわゆる「ベルギー話 (histoire belge)²²⁾」である。しかも「ベルギー話」をテーマにしたベルギー話である。最初の話者を A, 次の話者(ベルギー人)を B としよう。この話の「おち」の効果は B の発話「私はベルギー人です」から引き出される。本人は、ベルギー話はベルギー人をからかうためにフランス人が語る話なので、ベルギー人に向かってするのは失礼であるという観点から発話している。これに対し A は、ベルギー人は頭が悪いとの観点(一部のフランス人の偏見)から発話を解釈し、あたかも B が話を十分に理解できないかもしれないという懸念を表明しているかのように受けとめている。さて、以上のような「ずれ」が笑いを誘うとして、それはいったいどのような「ずれ」であろうか。「私はベルギー人です」という発話そのものが、上に列挙した「意味のずれ」の現象と同じようなやり方で二つの「意味」を持っているとは考え難い。むしろ一つの文が異なった使われ方をすると考えた方がよい。とりわけ同じ文が論証的に異なる結論を導くと考えられる。B は「私の前でベルギー話をするのは失礼だ」あるいは「ベルギー話をするのは止めて下さい」というような結論を示唆している。これに対し、A は、B がこの発話によって「(私は頭が悪いので)話がよくわからないかもしれません」という結論を示唆しているかのように受けとめている。

以上の例で「意味のずれ」と「使用のずれ」の違いが一層明確になったことと思う。しかしこのような区別そのものに問題がないわけではない。二点だけ指摘しておこう。

「意味のずれ」という場合に、「意味」とはいったい何であるかを全く定義していない。上に

あげた例では、「意味」を「現実」や「事態」とほぼ同義に使っていた。つまり、「Il est con の意味が曖昧である」という場合に、この文に対応づけられる現実が異なるというふうに理解していた。また「La cuisine de Marie est impeccable には少なくとも二つの解釈がある」という場合の「解釈」も、「発話が記述する事態」というほどの意味で使われていた。しかしこのような観点は絶対的なものではなく、無数にある「意味」の理論のほんの一つに過ぎない。別の観点からは全く別の結果が得られるかもしれない。

第二点——第一点と関連がある——は、「意味」と「使用」の区別にかかわる。この区別そのものを疑問視し、「使用」こそ「意味」であるとする立場があってもよい。実は筆者はこのような観点を支持するものであるが、本稿の枠内ではこれ以上発展させることはできない²³⁾。ただしこの場合、「意味ではなく使用にずれがある」という言い方そのものが無意味になってしまう。すると今度は、「意味のずれ」の現象としてあげた例をどのように扱うかという問題が生じる。

結 論

本稿の目的は、条件文の論証的「使い方」にいくつかのタイプを区別しうること、またそのような観点を導入することでフロイトの笑い話を分析できることを主張することであった。またそこから、発話の「内容」ではなく、文が「発話される事実」そのもの、すなわち「使用」に基づく言語観を一般的に模索する端緒を開くことも目指していた²⁴⁾。しかし更にもう一つ念頭にあったのは、言語学とテキスト分析の関係についての問題である。言語学の明確に定義されたコンセプトを援用することで、テキストの読者が「直感的に」感じとることに輪郭を与え、意識的にそれについて語れるようになることを示したかった。また同時に、「解釈」や「意味」の構築に、様々な文法的「しるし」が貢献する様を言語学的に跡づけられることも明らかになったと思う。この点は本稿の「意味」するところには明示されていないが、「事実上 (de facto)」示されたのではないと思う。

註

*本稿は、筆者が1998年10月にフランス国立社会科学高等研究院に提出した博士論文、Kida Kohei, *Une sémantique non-véritative des énoncés conditionnels : essai de traitement argumentatif*, thèse de doctorat, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, 1998 の一部を発展させたものである。ただし翻訳ではなく、全くの書き下ろしである。本稿の執筆にあたって、その一部を日本フランス語学会第176回例会（1999年4月24日、於青山学院大学）および有志による関西フランス語研究会（1999年5月22日、於大阪日仏センター）で口頭発表する機会があった。貴重なコメント・批判・助言を下さった諸氏に感謝したい。

- 1) 典型的な例は、ポール・ロワイヤルの『文法』および『論理学』の言語観である。Antoine Arnauld et Claude Lancelot, *Grammaire générale et raisonnée*, 1660 (reproduction de la 3^e édition,

- datée de 1676, présentée par Jean-Marc Mandosio, Editions Allia, 1997) および Antoine Arnauld et Pierre Nicole, *La Logique ou l'art de penser*, 1662 (édition critique de P. Claire et F. Girbal, P.U.F., 1965) 参照。またポール・ロワイヤルからの直接の影響という意味ではないが、言語を「観念」との関係で論じる立場は20世紀前半のフランスの言語研究でも根強い。次のような研究を参照されたい。Ferdinand Brunot, *La Pensée et la langue*, Masson, 1922 および Joseph Vendryes, *Le Langage*, La Renaissance du Livre, 1929 (nouvelle édition Albin Michel, 1968)。
- 2) このような言語観は英語圏の言語研究では極めて顕著であり、次のような啓蒙的な意味論の教科書にも支配的である。Ruth M. Kempson, *Semantic Theory*, Cambridge, Cambridge University Press, 1977 および Gennaro Chierchia and Sally McConnell-Ginet, *Meaning and Grammar*, Cambridge, Massachusetts, The MIT Press, 1990。フランス語の研究ではむしろ少数派であるが、しかし熱狂的な支持者もいる。その代表者 Robert Martin には次のような研究がある。*Inférence, antonyme et paraphrase*, Klincksieck, 1976, *Pour une logique du sens*, P.U.F., 1983 (2^e édition revue et augmentée 1992), *Langage et croyance*, Bruxelles, Mardaga, 1987。
 - 3) 創始者として知られているのはオースティンである。John L. Austin, *How to do things with words*, Oxford, Oxford University Press, 1962 (坂本百大訳, 『言語と行為』, 大修館書店, 1978, traduction par Gilles Lane, *Quand dire, c'est faire*, Editions du Seuil, 1970)。またオースティンの分析を受け継ぎ, 『言語行為論』を広く普及させたのはサールである。John R. Searle, *Speech Acts*, Cambridge, Cambridge University Press, 1969 (坂本百大・土屋俊訳, 『言語行為』, 勁草書房, 1986, traduction par Hélène Pauchard, *Les actes de langage*, Hermann, 1972)。日本語で書かれた概説書としては, 山梨正明, 『発話行為』, 大修館書店, 『新英文法選書』第12巻, 1986が便利である。言語行為論には膨大な研究があり, その全てに触れる余裕はない。ここでは, 比較的知られていない, フランス語における言語行為論関係の研究をいくつか挙げるにとどめる。まずバンヴェニストが『言語行為』という概念を使わずにオースティンと類似の結論に至った論文として「De la subjectivité dans le langage», in *Journal de Psychologie*, juillet-septembre 1958 がある。またバンヴェニストがオースティンを評価しつつも批判している論文として, 「La philosophie analytique et le langage», in *Les Etudes philosophiques*, n° 1, janvier-mars 1963 がある。いずれも次の論集に収められている。Emile Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, 1, Gallimard, 1966。またオースティンの思想を紹介しつつ, 「遂行動詞によって遂行される行為は言語に内在的なものではなく, 派生的なものである」という論を展開したものとして François Récanati, *Les Enoncés performatifs*, Editions de Minuit, 1981 (英訳 *Meaning and Force*, Cambridge, Cambridge University Press, 1987) がある。最後に, 全く独自の言語行為論を提示したものに, Oswald Ducrot, « Illocutoire et performatif », in *Linguistique et Sémiologie*, n° 4, 1977 (Oswald Ducrot, *Dire et ne pas dire*, Hermann, 3^e édition corrigée et augmentée 1991 に再録) がある。
 - 4) Sigmund Freud, *Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten*, Leipzig und Wien, Deuticke, 1905。これには次のような版がある。*Gesammelte Werke*, VI, London, Imago Publishing Co., 1940 あるいは *Studienausgabe*, IV, Frankfurt am Main, S. Fischer Verlag, 1982。また邦訳には次のものがある。「機知——その無意識との関係」, 懸田克躬他訳, 『フロイト著作集』第4巻, 人文書院, 1970, p.237-421。
 - 5) Sigmund Freud, *Le mot d'esprit et sa relation à l'inconscient*, traduit de l'allemand par Denis Messier, Gallimard, « folio », 1988。引用はこの版による。また日本語訳は, この仏語訳からの拙訳であり, 上記の『フロイト著作集』の訳と若干異なる。
 - 6) 言語学とテキスト分析の関係についての本稿の立場は, 次の研究から想を得た。Oswald Ducrot et al., *Les Mots du discours*, Editions de Minuit, 1980。Oswald Ducrot, « Albine, ou les surprises de l'innocence (explication de la scène 1 de l'acte 1 de *Britannicus*) », in Georges Maurand (éd.), *Le*

- Dialogue* (11^e colloque d'Albi «Langages et signification»), Toulouse, Presses de l'Atelier d'imprimerie de l'Université de Toulouse-le Mirail, 1991. Oswald Ducrot, «Opérateurs argumentatifs et analyse de textes», in William J. Ashby *et al.* (ed.), *Linguistic Perspectives on the Romance Languages*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Co., «Current issues in linguistic theory» 103.
- 7) フランス語で書かれたものとしては, Algirdas Julien Greimas, *Sémantique structurale*, Larousse, 1966 (nouvelle édition, P.U.F., 1986), p.91 および Oswald Ducrot, *Les Echelles argumentatives*, Editions de Minuit, 1980, p.52 がある。また日本語で書かれたものでは, 坂原茂, 『日常言語の推論』, 東京大学出版会, 「認知科学選書」2, 1985, p.91 および小泉保, 『ジョークとレトリックの語用論』, 大修館書店, 1997, p.34-35 がある。
 - 8) Si P, Q という形の文が全て条件文であるとは限らない。換言すれば, ある文が Si P, Q という形をとることは, それが条件文であるための必要条件ではあるが十分条件ではない。例えば «Si Pierre est grand, Jacques est petit.» (ピエールは大きいジャックは小さい) は対立する二つの事実を提示しており, 一方が他方の条件になるわけではなく, ここで定義するところの「条件文」ではない。また «Si tu as soif, il y a de la bière au frigo.» (喉が乾いたのなら, 冷蔵庫にビールがある) も「条件文」ではない。後者の例の si の用法に対応する英語の if を本格的に論じた研究として, John L. Austin, «Ifs and cans», in *Proceedings of the British Academy*, 1956 (John L. Austin, *Philosophical papers*, Oxford, Oxford University Press, 1961 に再録) がある。また日本語における類似の現象を扱った研究に坂原茂の前掲書がある。更に, «Si j'étais à la place de mon patron, j'augmenterais mon salaire.» (もし俺が俺の上司だったら, 自分の給料を上げるんだがなあ) のように, Si P, Q において P が半過去 (あるいは大過去), Q が条件法現在 (あるいは条件法過去) の場合 (いわゆる「非現実的条件文」あるいは「反事実的条件文」) は考察の対象としない。
 - 9) 『ポール・ロワイヤル文法』には次のような記述が見られる。「La seconde sorte de mots qui signifient la forme de nos pensées, et non pas proprement les objets de nos pensées, sont les conjonctions, comme *et, non, vel, si, ergo, et, non, ou, si, donc*. Car si on y fait bien réflexion, on verra que ces particules ne signifient que l'opération même de notre esprit, qui joint ou disjoint les choses, qui les nie, qui les considère absolument, ou avec condition.» (Arnault et Lancelot, *Grammaire générale et raisonnée*, ch. XXIII, *op. cit.*, p.99)。またロベール・マルタンは命題論理学の枠組みをそのまま踏襲して次のような記述を提案している。「A partir de p: *Il fera beau demain* et de q: *J'irai me promener demain*, je forme P: *S'il fait beau demain, j'irai me promener*. Cette proposition exclut qu'il puisse faire beau demain et que je n'aille pas me promener. Elle ne se prononce pas sur le cas où il ne ferait pas beau.» (Martin, *Inférence, antonyme et paraphrase*, *op. cit.* p.29)。
 - 10) *Le Bourgeois gentilhomme* (1670), in Molière, *Œuvres complètes* (texte établi, présenté et annoté par Georges Couton), tome II, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1971。訳文は岩波文庫の鈴木力衛訳に従った。原文, 訳文の引用の後にそれぞれの出典のページ数を記した。
 - 11) オースティンの考え方 (*How to do things with words*, *op. cit.*) を敷衍すると次のようになる。言語を使って遂行し得る行為にも色々あるが, 特に重要なのは「発語内行為」(illocutionary act) と「発語媒介行為」(perlocutionary act) である。前者が言語形式に内在的で, 一次的に遂行される行為であるのに対し, 後者は二次的・派生的に遂行される行為である。例えば命令形という文法要素を使うと一次的には「要求」という行為 (発語内行為) が遂行される。しかしそれに加えて, 場合によっては, 例えば「侮辱」という二次的行為 (発語媒介行為) を遂行することもある (兵士が上官に向かって «Viens!» と言うような場合)。ただしこのような分割そのものの妥当性や, 仮に発語内行為の概念を認めるとしてそれが果たして文法要素に内在的かどうかという問題について言語学者や哲学者

- の意見は一致していない。この点は Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge, Cambridge University Press, 1983 あるいは Récanati の前掲書に要領よくまとめられている。
- 12) ただし「論証」も言語行為の一つであるとも考えることも不可能ではない。実際、80年代半ばまでのデュクロとアンスコンブルは「論証行為」を発語内行為の一つとして捉えていた（現在ではこの考え方は放棄されている）。Oswald Ducrot, *Les Echelles argumentatives*, op. cit., および Jean-Claude Anscombre et Oswald Ducrot, *L'Argumentation dans la langue*, Bruxelles, Mardaga, 1983 参照。
 - 13) この事実を発見したのはオズワルド・デュクロの功績である。本稿もデュクロの研究に負うところが大きい。デュクロやその研究グループには膨大な業績があり、その紹介は紙幅の都合上不可能であるが、Kida Kohei, op. cit. にはほぼ完全に近い文献リストがあるので、そちらを参照して頂きたい。それ以外にも、Jean-Claude Anscombre (éd.), *Théorie des topoï*, Editions Kimé, 1995 にも詳しい文献リストがある。
 - 14) ちなみに, venir de... (～したばかり) にはこのような制約はない。例えば交通事故が発生し、その後すぐにピエールが到着した場合に « Pierre vient d'arriver. » (ピエールは着いたばかりだ) と発話すると、そこから導ける結論は « Il a pu voir ce qui s'est passé. » (何が起こったか見ることができた) と « Il n'a pas pu voir ce qui s'est passé. » (何が起こったか見ることができなかった) の両方が可能である。
 - 15) 同様の見解がデュクロの研究にも見られる。Oswald Ducrot, « Albine, ou les surprises de l'innocence (explication de la scène 1 de l'acte 1 de *Britannicus* », op. cit. および « Opérateurs argumentatifs et analyse de textes », op. cit. 参照。ただし本稿の規定の仕方は独自のものである。またデュクロの研究では、本稿の分類におけるタイプ(iii)は言及されていない。
 - 16) タイプ(i)では, Si P, Q. Donc X において X の選択に P は関与しないことになる。換言すれば、このタイプでは Si P, Q と発話することが、単に Q と発話するのと機能的にそれほど大差ないことになる。ただしこの場合 Si P の部分が全く無意味かというそうではない。Si P はいわば Q の発話を「和らげる」働きをする。従って、Q だけから X が導かれる場合と Si P, Q から X を導く場合を比べると、X に対して Si P, Q は Q よりも「弱い」論拠になる。本稿はこの点には詳しく触れない。
 - 17) タイプ(ii)について、少なくとも二つの問題が残されている。まず Q が「誰にとって」望ましいか否かを限定するのは困難である。話し手にとってか、聞き手にとってか、その両方か、あるいは第三者にとってか、一概にはいえない。第二の問題は、「P の成立が望ましい」あるいは「望ましくない」という結論をどのように言語化するかということである。ここでは il faut および il ne faut pas という表現を使ったが、他にも様々な可能性がある (tu devrais/tu ne devrais pas, je souhaite/je ne souhaite pas など)。むしろ重要なのは、これらの表現を一括するコンセプトを探すことであろう（「望ましい」では不十分である）。
 - 18) このタイプ(iii)と他のタイプには決定的な違いがある。タイプ(i)および(ii)においては Si P, Q と X の関係は一方的なものである。Si P, Q. Donc X とはいえども X Donc si P, Q とはいえない、あるいは後者が可能だとしてもその場合 donc の用法が極めて特殊なものとなる。これに対してタイプ(iii)においては、Si P, Q. Donc X ということもできるし、X Donc si P, Q ということもできる。
 - 19) 詳しくは Kida Kohei, op. cit. を参照されたい。
 - 20) Molière, *L'Avare* (1668), in *Œuvres complètes*, tome II, op. cit.。第5幕第3場、アルパゴンとヴァレールのやりとりで、双方とも代名詞の elle や la を使うが、アルパゴンは ma cassette (金の入った小箱) を、ヴァレールはアルパゴンの娘エリーズをそれぞれ指している。しかしお互いその違いに気づいていない。
 - 21) Dan Sperber et Deidre Wilson, *La Pertinence*, Editions de Minuit, 1989, p.274 から借用。

- 22) フランス人がベルギー人を（話し方が遅い、判断が鈍い、頭が悪い、フランス語に訛りがあるなどの独断的理由で）からかうために作った、ベルギー人を登場人物とする滑稽な話。「一種の愛情表現である」とするフランス人もいるが、人種差別的な含みがないわけでもなく、それを聞くベルギー人はあまり喜ばない。様々なヴァリエーションがあり、引用したもの以外にも次のような話がある。夜道、地面を這うように何か探しているベルギー人に、通行人が訊ねる。「何か探し物ですか。」「車のキーを落としまして。」「その辺に落としたのは確かなんですか。」「いいえ。でも街灯があるのはここだけですから。」
- 23) Kida Kohei, *op.cit.* はこの立場を正当化する試みである。
- 24) 厳密に言えば、本稿が明らかにしたのは「条件文を使ってできること」だけであり、「条件文にしかできないこと（条件文を使わなければならないこと）」ではない。この後者を明らかにしなければ、「使用」こそ「意味」であるという主張、また言語形式の本質は「使用」の観点でしか捉えることができないという主張の論証としては不十分である。